

## IV 作物別施肥基準

### 【作物】

- 1 施肥及び土壌管理上の留意点 . . . . . IV 【作物】 - 1
  - (1) 水稲 . . . . . IV 【作物】 - 1
    - ア 施肥上の留意点
    - イ 土壌管理上の留意点
    - ウ 育苗上の留意点
  - (2) 麦類、大豆、ソバ . . . . . IV 【作物】 - 3
    - ア 土壌管理上の留意点
- 2 施肥管理に関する技術 . . . . . IV 【作物】 - 5
  - (1) 水稲早生品種「あいちのこころ」の安定栽培に向けた施肥法の検討  
. . . . . IV 【作物】 - 5
  - (2) 水稲品種「ミネアサヒ SBL」良食味栽培法の検討 . . . . . IV 【作物】 - 6
- 3 施肥基準 . . . . . IV 【作物】 - 7
  - (1) 水稲・平坦部・稚苗移植・早期栽培（あきたこまち） . . . . . IV 【作物】 - 7
  - (2) 水稲・平坦部・稚苗移植・早期栽培（コシヒカリ） . . . . . IV 【作物】 - 8
  - (3) 水稲・平坦部・稚苗移植・早植栽培（あいちのこころ） . . . . . IV 【作物】 - 9
  - (4) 水稲・平坦部・稚苗移植・早植栽培（大地の風） . . . . . IV 【作物】 - 10
  - (5) 水稲・平坦部・稚苗移植・早植栽培（あいちのかおり S B L） . . . . . IV 【作物】 - 11
  - (6) 水稲・平坦部・稚苗・中苗移植・普通期栽培  
（あいちのかおり S B L） . . . . . IV 【作物】 - 12
  - (7) 水稲・平坦部・稚苗移植・早植栽培（若水） . . . . . IV 【作物】 - 13
  - (8) 水稲・平坦部・稚苗移植・普通期栽培（夢吟香） . . . . . IV 【作物】 - 14
  - (9) 水稲・山間部・稚苗移植・早植栽培（チヨニシキ） . . . . . IV 【作物】 - 15
  - (10) 水稲・中山間部・稚苗移植・早植栽培（ミネアサヒ S B L、みねはるか）  
. . . . . IV 【作物】 - 16
  - (11) 水稲・中山間・山間部・稚苗移植・早植栽培（夢山水） . . . . . IV 【作物】 - 17
  - (12) 水稲・平坦部・不耕起乾田直播・全量基肥栽培（コシヒカリ） . . . . . IV 【作物】 - 18
  - (13) 水稲・平坦部・不耕起乾田直播・全量基肥栽培（あいちのこころ）  
. . . . . IV 【作物】 - 19
  - (14) 水稲・平坦部・不耕起乾田直播・全量基肥栽培  
（あいちのかおり S B L） . . . . . IV 【作物】 - 20
  - (15) 小麦（きぬあかり） . . . . . IV 【作物】 - 21
  - (16) 小麦（ゆめあかり） . . . . . IV 【作物】 - 22
  - (17) 大豆・平坦部・耕起播種・秋大豆 . . . . . IV 【作物】 - 23
  - (18) ソバ・秋ソバ . . . . . IV 【作物】 - 24



## 1 施肥及び土壌管理上の留意点

### (1) 水稲

#### ア 施肥上の留意点

##### ア) 肥効調節型肥料による全量基肥栽培

- a 肥効調節型肥料（被覆尿素）で全量基肥施用する場合は、土壌の全窒素含量及び培養窒素量を把握し、施肥診断に基づいて行う。土壌診断ができない場合は、分施型施肥より 10%減量する。地力を含めた窒素供給量が少ないと、白未熟粒の発生が多くなることが懸念されるため、極端に施肥量を削減しない。
- b 品種、作期、地域に適合した肥料の種類（窒素の溶出パターン）があるので、選択する上で留意する。
- c 移植同時施肥（側条施肥）は、局所的に肥料濃度が高く、利用率も高いので、施肥窒素量を全層分施型施肥の場合より 10%程度減量する。
- d 不耕起 V 溝直播栽培、育苗箱施肥栽培など窒素単肥型施肥栽培で、施肥時にリン酸、カリウム肥料投入が困難な体系では、もみ収奪分（リン酸：4～5kg/10a、カリウム：3～4kg/10a 程度）を熔リン、ケイ酸カリなど遅効性成分を主体とする資材で、荒起こし時、冬季代かき時などに全層施用する。
- e プラスチック被覆肥料を利用している場合、被膜殻のほ場外への流出を防止するため、浅水代かきや落水口にネットを張って被膜殻を捕集する等、環境負荷軽減に努める。

##### イ) 基肥、穂肥による分施栽培

- a 基肥の施用法は全層施肥とし、施用後速やかに代かきする。また、代かき直後の落水は有機物や肥料成分の流亡損失が大きく、河川等を汚染する原因となるので、砂質土壌では 2～3 日、粘質土壌では 4～5 日程度の間隔をあける。
- b 砂質田、漏水田、基盤整備田は保肥力が小さく、肥効の低下が早い傾向にある。このため、基肥施用分の一部（10a 当たり窒素 2kg 以内）を中間追肥に回し、移植後 15～20 日を目安に施用する。なお、肥効が持続する肥効調節型肥料を利用することが望ましい。
- c 穂肥は出穂前 25～18 日と同 15～8 日の 2 回に同量ずつ分施することを原則とするが、この時期の稲体の栄養状態や天候によっては、施用時期、施用量を加減する。稲体の栄養状態はグリーンメーター（葉緑素計）、カラースケール（葉色票）等を用いて葉色の濃淡を判定する方法が簡便で精度が高い。なお、出穂後の実肥は米質・食味の低下を招くので施用しない。

#### イ 土壌管理上の留意点

- ア) 土壌は養分の保持、適正な根群域の確保という観点から、一定の作土深を保つ必要がある。作土深はプラウ耕等による深耕を行い、15cm を目標とする。
- イ) 土壌改良資材は、pH の矯正とケイ酸、鉄等三要素以外の養分バランスを考慮した適正な施用が大切である。同一の資材を長年連用せず 3～4 年毎に資材を変えて施用する。
- ウ) 基盤整備田では一般に作土の窒素肥沃度が低く、土壌耕盤層の破壊や圧密により土壌の物理性が悪化し、稲の生育障害、作業性の低下を招くことが多い。この

ため、土壌改良資材や有機物の施用による作土の栄養改善や深耕、心土破碎等による下層土の物理性改善に努める。

エ) 温室効果ガスであるメタンの排出量削減に向けて、収穫後のわらは腐熟促進のために速やかにすき込む（秋耕）。

オ) 水稻をホールクロープサイレージとして生産する場合、もみ収奪分に加えてわら収奪分のリン酸とカリウムを施用する必要がある。家畜ふん堆肥にはリン酸とカリウムが含まれることから、耕畜連携に努め、有機質資材施用基準に準じて家畜ふん堆肥を施用する。

#### ウ 育苗上の留意点

表IV-作-1 育苗における苗質別の施肥量（g/箱）

成分	稚苗	中苗		
	施用量	施用量	施肥配分	
			基肥	追肥
N	1.0	1.4	0.7	0.7
P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	1.0	1.6	0.8	0.8
K <sub>2</sub> O	1.0	3.0	1.5	1.5

ア) 育苗床土は、あらかじめ施肥後の pH、EC を測定し、pH4.5～5.5 となるよう調整する。施肥及び pH 調整により EC が 2dS/m を超える場合は、濃度障害による発芽遅延や発根障害を受けるおそれがあるので注意する。

イ) 早期栽培など低温期の育苗では、肥料の利用率が低いので施用量を多めとし、気温が上昇するに従って少なめとする。

ウ) カリウムが不足すると苗質が著しく低下するので、山砂などカリウム欠乏を生じやすい用土を利用する場合はやや多めとする。

エ) リン酸は過剰障害を起こしやすいので、箱あたり 3g 以上とならないよう注意する。

オ) 健全な中苗とするためには、初期生育をやや抑え後半の生育を促進するのがよい。そのため分施肥が適し、2 葉期に基肥と同量を追肥する。

カ) 中苗は育苗期間が長く、設置床からの養分補給が期待できるので、施肥量はやや少なめでよい。

## (2) 麦類、大豆、ソバ

### ア 土壌管理上の留意点

- ア) 麦類は酸性に弱く、小麦は pH5.5 以下、大麦は pH6.0 以下では著しく減収する。pH6.0~6.5 を維持するよう石灰質資材の施用に努める。
- イ) 麦類は湿害に弱く、土壌中の気相率が 5%以下になると根が呼吸阻害により、著しい生育障害を起こす。特に、発芽期と登熟期の湿害は収量への影響が大きい。本県の麦作はこの 2 時期に多雨に遭いやすい。地形、土壌型を考慮して十分な排水対策を講じておく必要がある。
- ウ) 大豆は土壌条件に対する適応性が比較的大きいとされるが、播種期の湿害、着莢期の干害に弱い。このため、土壌の物理性が劣るほ場では多収は得られない。排水が良好でかつ保水力が大きく、カルシウム、リン酸、マグネシウム、カリウムなどの養分が豊富な土壌が適する。また、大豆をはじめ豆類は吸収窒素の大部分を根粒菌に依存している。根粒菌の活性を高めるためには、物理性の改善、堆肥及び土壌改良資材の施用に努める。
- エ) ソバは吸肥力が強く土壌を選ばず、少肥栽培でよいとされている。また、土壌の乾燥に対して比較的強い反面、発芽時の酸素要求度が高く湿害にきわめて弱い。このため、播種時に排水対策を講ずるとともに、播種後に大雨が予想される場合は播種をずらす。
- オ) 転換畑では、土壌が水田状態から畑状態に変化することにより、塩基の溶脱、有機物消耗が促進されて地力が低下し、酸性が強くなるので地力増強対策に十分留意する。

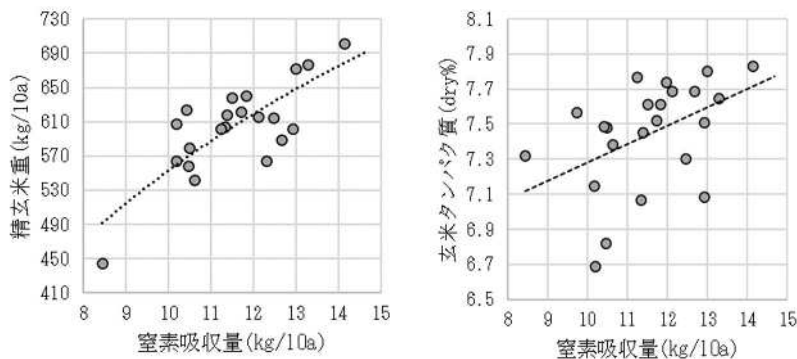


## 2 施肥管理に関する技術

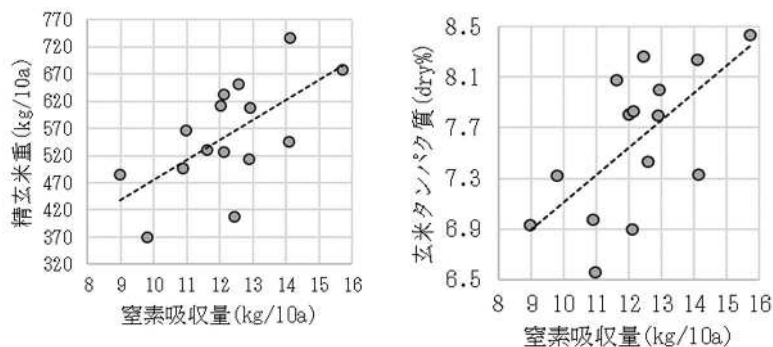
### (1) 水稲早生品種「あいちのころ」の安定栽培に向けた施肥法の検討

愛知県は2019年に愛知県経済農業協同組合連合会との共同研究により、早生熟期の高温耐性水稲品種「あいちのころ」を育成した。「あいちのころ」は2023年9月に奨励品種として採用され、2025年から一般栽培が開始された。普及推進に向けた栽培指導の指針を作成するため、2019年から品種特性及び現場ニーズに即した栽培法の開発を目的とした試験研究を行い、2023年に精玄米重570kg/10a、玄米タンパク質7.7%（乾物あたり）以下を安定的に確保することを目標とした「あいちのころ」安定栽培マニュアルを作成した。

2022年に移植、不耕起V溝直播栽培（以下、V直）において、標準タイプ、中生タイプの全量基肥肥料を用いて栽培試験を行った結果、いずれの栽培法においても中生タイプで玄米タンパク質が高まったため、標準タイプを慣行肥料として選定した（データ省略）。2022～2023年に移植11地点、V直7地点で標準タイプ肥料を用いた栽培試験を実施したところ、移植栽培では、成熟期の窒素吸収量11kg/10a程度で精玄米重570kg/10a、玄米タンパク質7.7%以下を安定的に得られると考えられた（図IV-作-1）。V直では成熟期の窒素吸収量で12kg/10a以上必要であると考えられ、13kg/10aを超えると玄米タンパク質が7.7%以上となるリスクが高まった（図IV-作-2）。地力中庸水田（培養窒素3～4 mg/100g、全窒素0.13%）における目標窒素吸収量を得るための窒素施肥量を算出したところ、側条施肥による移植で7～8kg/10a、V直で9～10kg/10aが妥当と考えられた。



図IV-作-1 窒素吸収量と精玄米重、玄米タンパク質の関係（移植）  
（2022～2023年 県内11地点のデータ）



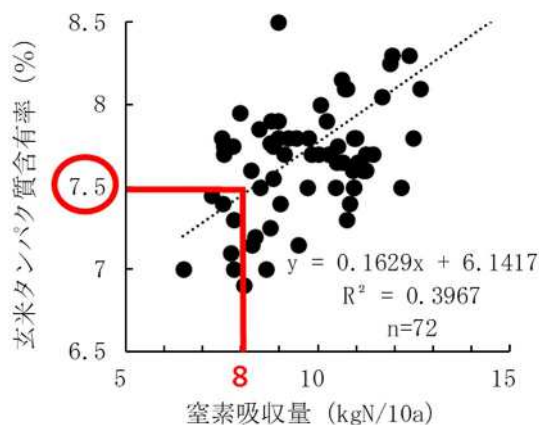
図IV-作-2 窒素吸収量と精玄米重、玄米タンパク質の関係（V直）  
（2022～2023年 県内7地点、V直栽培のデータ）

## (2) 水稲品種「ミネアサヒSBL」良食味栽培法の検討

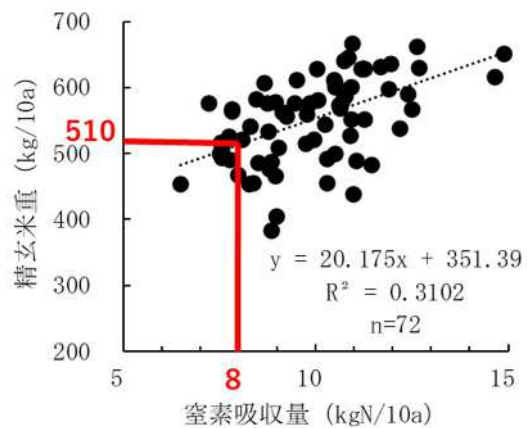
本県育成の中山間地域向け良食味水稲品種「ミネアサヒ」は、2020年に(一財)日本穀物検定協会(以下、穀物検定協会とする。)が公表する米の食味ランキングで特A評価を得た。2021年から、本県育成で耐病性以外の形質が「ミネアサヒ」と同等の「ミネアサヒSBL」に全面的に切り替わったことに伴い、本品種においても特A評価を得るための栽培法を検討した。

穀物検定協会への食味依頼試験(2021年)の結果中、最も評価値が高かった供試米と同一ほ場のサンプルを山間農業研究所で測定した結果、玄米タンパク質含有率は7.5%(乾物換算値)であった。2020~2022年の結果から、この値と同等となる成熟期窒素吸収量は8kg/10a、この場合の精玄米重は510kg/10a(坪刈り)と推定された(図IV-作-3及び4)。

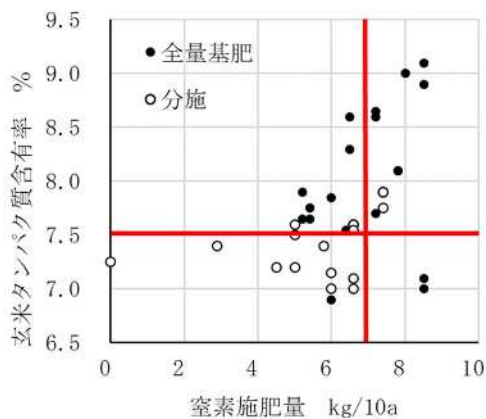
施肥量が6~7kgN/10a以上になると、精玄米重は概ね確保できたものの、玄米タンパク質含有率が7.5%以下の地点が減少した。このことから、「ミネアサヒSBL」の良食味米生産のための施肥量の上限は6~7kgN/10aと考えられた(図IV-作-5)。側条施肥で分施栽培の場合、基肥5kgN/10a、穂肥1.6kgN/10aの1回施用を目安とし、玄米タンパク質含有率を7.5%以下にするため、穂肥は遅くとも出穂22日前までに施用する必要があると考えられた(図IV-作-6)。



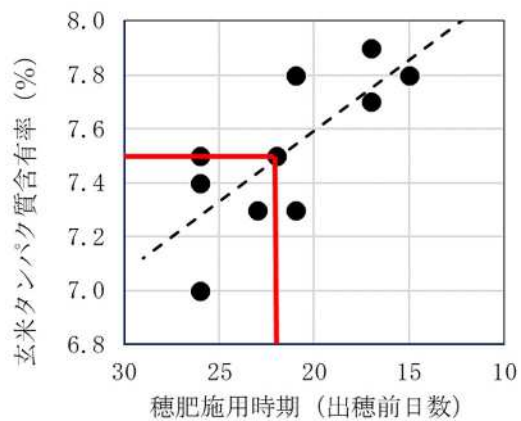
図IV-作-3 成熟期窒素吸収量と玄米タンパク質含有率との関係



図IV-作-4 成熟期窒素吸収量と精玄米重との関係



図IV-作-5 窒素施肥量と玄米タンパク質含有率との関係



図IV-作-6 穂肥施用時期と玄米タンパク質含有率との関係

















(9) 水稲 (山間部 稚苗移植 早植栽培)

主要品種名 チヨニシキ  
 栽植密度 60~70 株 /3.3 m<sup>2</sup>  
 目標収量 510 kg/10a

主要作業

	1月			2月			3月			4月			5月			6月			7月			8月			9月			10月			11月			12月		
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下
主要作業等										は種			移植										出穂				収穫									
施肥													基肥										穂肥1	穂肥2												

施肥基準

kg/10a

施用時期		N	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	K <sub>2</sub> O	備考
基肥	5月上旬	5	5	2	
穂肥1回目	7月上旬	1.5	0	1	
穂肥2回目	7月中旬	1.5	0	1	
施肥合計量		8	5	4	

施用上の留意点

- ・ 穂肥 1回目：出穂25日前、2回目：15日前を目安とする。
- ・ 肥効調節型肥料を用いた全量基肥栽培の場合、全層施肥では分施肥の10%、側条施肥では同20~30%減量する。

(10) 水稲 (中山間部 稚苗移植 早植栽培)

主要品種名 ミネアサヒSBL, みねはるか

栽植密度 60~70 株 /3.3 m<sup>2</sup>

目標収量 510 kg/10a

主要作業

	1月			2月			3月			4月			5月			6月			7月			8月			9月			10月			11月			12月		
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下
主要作業等										は種			移植										出穂			収穫										
施肥													基肥										穂肥1	穂肥2												

施肥基準

kg/10a

施用時期		N	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	K <sub>2</sub> O	備考
基肥	5月上旬	5	5	2	
穂肥1回目	7月上旬	1.5	0	1	
穂肥2回目	7月中旬	1.5	0	1	
施肥合計量		8	5	4	

施用上の留意点

- ・ 穂肥 1回目：出穂25日前、2回目：15日前を目安とする。
- ・ 肥効調節型肥料を用いた全量基肥栽培の場合、全層施肥では分施肥の10%、側条施肥では同20~30%減量する。
- ・ 「ミネアサヒSBL」の良食味米（タンパク含量7.5%以下）生産のための施肥量の上限は7kgN/10aとする。その側条施肥で分施肥栽培の場合、基肥5kgN/10a、穂肥1.6kgN/10aの1回施用を目安とし、穂肥は遅くとも出穂22日前までに施用する。

(11) 水稻 (中山間・山間部 稚苗移植 早植栽培)

主要品種名 夢山水

栽植密度 60~70 株 /3.3 m<sup>2</sup>

目標収量 450 kg/10a

主要作業

	1月			2月			3月			4月			5月			6月			7月			8月			9月			10月			11月			12月		
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下
主要作業等										は種			移植										出穂			収穫										
施肥													基肥										穂肥1	穂肥2												

施肥基準

kg/10a

施用時期		N	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	K <sub>2</sub> O	備考
基肥	5月上旬	4	5	2	
穂肥1回目	7月上旬	1	0	1	
穂肥2回目	7月中旬	1	0	1	
施肥合計量		6	5	4	

施用上の留意点

- ・穂肥 1回目：出穂25日前、2回目：15日前を目安とする。
- ・地力が高く、玄米窒素が高まる恐れがある圃場では、穂肥を減量し(2kg/10a)、1回で施用する。

(12) 水稲 (平坦部 不耕起乾田直播 全量基肥)

主要品種名 コシヒカリ

播種量 6~8 kg/10a

目標収量 510~540 kg/10a

主要作業

	1月			2月			3月			4月			5月			6月			7月			8月			9月			10月			11月			12月		
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下
主要作業等							は種												出穂						収穫											
施肥				基肥																																

施肥基準

乾田直播専用全量基肥窒素肥料 (早生タイプ)	7kgN/10a
---------------------------	----------

\* 県内の標準的な地力の場合

施用上の留意点

- ・ 下表を目安に、地力によって施肥量を増減する。

培養窒素量 (mg/100g)	kgN/10a						
	土壌の全窒素含量 (%)						
	0.08	0.10	0.12	0.14	0.16	0.18	0.20
1.0	10	10	9	9	8	8	7
2.0	9	9	8	8	7	7	6
3.0	8	8	8	7	7	6	6
4.0	8	7	7	6	6	5	5
5.0	7	6	6	5	5	5	5
6.0	6	5	5	5	5	5	5

培養窒素量：湿土30°C4週間静置培養により発現する窒素量

- ・ 大豆栽培跡では10%減を目安とする。
- ・ 土壌分析値が得られない場合は、慣行移植栽培施肥量を目安とする。
- ・ リン酸、カリは、土壌診断に基づき施用するが、原則としてもみ収奪分を熔成リン肥・ケイ酸カリなど遅効性成分を主体とした肥料で冬季代かき時または鎮圧時に全層施用する。

(13) 水稲 (平坦部 不耕起乾田直播 全量基肥)

主要品種名 あいちのこころ  
 播種量 6~8 kg/10a  
 目標収量 540~570 kg/10a

主要作業

	1月			2月			3月			4月			5月			6月			7月			8月			9月			10月			11月			12月		
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下
主要作業等							は種															出穂			収穫											
施肥							基肥																													

施肥基準

乾田直播専用全量基肥窒素肥料 (標準タイプ)	10kgN/10a
---------------------------	-----------

\* 県内の標準的な地力の場合

施用上の留意点

- ・ 下表を目安に、地力によって施肥量を増減する。

培養窒素量 (mg/100g)	kgN/10a						
	土壌の全窒素含量 (%)						
	0.08	0.10	0.12	0.14	0.16	0.18	0.20
1.0	13	13	12	12	11	11	11
2.0	12	12	11	11	11	10	10
3.0	11	11	11	10	10	9	9
4.0	11	10	10	9	9	9	8
5.0	10	9	9	9	8	8	8
6.0	9	9	8	8	8	7	7

培養窒素量：湿土30°C4週間静置培養により発現する窒素量

- ・ 大豆栽培跡では10%減を目安とする。
- ・ 土壌分析値が得られない場合は、分施移植栽培施肥量を目安とする。
- ・ リン酸、カリは、土壌診断に基づき施用するが、原則としてもみ収奪分を熔成リン肥・ケイ酸カリなど遅効性成分を主体とした肥料で冬季代かき時または鎮圧時に全層施用する。

(14) 水稲 (平坦部 不耕起乾田直播 全量基肥)

主要品種名 あいちのかおりSBL

播種量 6~8 kg/10a

目標収量 540~570 kg/10a

主要作業

	1月			2月			3月			4月			5月			6月			7月			8月			9月			10月			11月			12月		
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下
主要作業等							は種																													
施肥							基肥																													

施肥基準

乾田直播専用全量基肥窒素肥料 (中生タイプ)	9.5kgN/10a
---------------------------	------------

\* 県内の標準的な地力の場合

施用上の留意点

- ・ 下表を目安に、地力によって施肥量を増減する。

培養窒素量 (mg/100g)	kgN/10a						
	土壌の全窒素含量 (%)						
	0.08	0.10	0.12	0.14	0.16	0.18	0.20
1.0	13	12	12	11	11	11	10
2.0	12	11	11	10	10	10	9
3.0	11	11	10	10	9	9	8
4.0	10	10	9	9	8	8	8
5.0	9	9	8	8	8	7	7
6.0	9	8	8	7	7	7	7

培養窒素量：湿土30°C4週間静置培養により発現する窒素量

- ・ 大豆栽培跡では10%減を目安とする。
- ・ 土壌分析値が得られない場合は、分施移植栽培施肥量を目安とする。
- ・ リン酸、カリは、土壌診断に基づき施用するが、原則としてもみ収奪分を熔成リン肥・ケイ酸カリなど遅効性成分を主体とした肥料で冬季代かき時または鎮圧時に全層施用する。

(15) 小麦 (耕起播種 条播 散播)

主要品種名 きぬあかり  
 播種量 7 kg/10a  
 目標収量 480 kg/10a

主要作業

	11月			12月			1月			2月			3月			4月			5月			6月			7月			8月			9月			10月		
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下
主要作業等		は	種														出	穂					収	穫												
施肥		基	肥					追	肥	1					追	肥	2																			

施肥基準

kg/10a

施用時期		N	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	K <sub>2</sub> O	備 考
基肥	11月中旬	8	6	6	
穂肥 1 回目	1月下旬	4	0	2	
穂肥 2 回目	3月上旬	4	0	2	
施肥合計量		16	6	10	

施用上の留意点

- ・ 茎立期の生育状況から追肥量を加減する（農業の新技术No.112「小麦品種「きぬあかり」の生育に応じた施肥法」）。
- ・ 低湿地、排水不良田等施肥効率の低いほ場では施肥量を増量する。
- ・ 極端な多肥栽培では病害の発生が増えるため注意する。

(16) 小麦 (耕起播種 条播 散播)

主要品種名 ゆめあかり  
 播種量 8 kg/10a  
 目標収量 450 kg/10a

主要作業

	11月			12月			1月			2月			3月			4月			5月			6月			7月			8月			9月			10月		
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下
主要作業等			播種												出穂						収穫															
施肥			基肥						追肥1						追肥2																					

施肥基準

kg/10a

施用時期		N	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	K <sub>2</sub> O	備 考
基肥	11月下旬	16	6	6	基肥には実肥成分（穂揃期以降の溶出量4～5kg/10a）を配合した肥料を使用する
穂肥1回目	1月下旬	4	0	2	
穂肥2回目	3月上旬	4	0	2	
施肥合計量		24	6	10	

施用上の留意点

- ・ 茎立期の生育状況から追肥量を加減する。
- ・ 硬質麦は子実蛋白質含量を高める必要があるため、基肥には実肥成分（穂揃期以降の溶出量4～5kg/10a）を配合した肥料を施用する。
- ・ 低湿地、排水不良田等施肥効率の低いほ場では施肥量を増量する。



